

『近代南通土布史』

曾 田 三 郎

一 本書の概要

近年、中国では経済史関係の史料集の編纂と刊行がすすめられ、研究もかなり盛んにおこなわれているようである。中国近代の農村綿紡織業についても、黄逸平、夏林根といった人たちが論文を発表している。近代農村綿紡織業については、一九五〇年代末から六〇年代にかけて日本や中国で研究がすすめられ、外国綿製品の流入によって農村綿紡織業が急速に破壊されたことを指摘する人が多かったが、黄逸平、夏林根両氏の論文に特徴的なことは、外国綿製品流入のもたらした農村綿紡織業への破壊的作用の過度の強調をいまいめている点である。

ここに紹介する「近代南通土布史」は、昨年一二月に中国に行かれた広島大学の横山英氏が南京大学で周衍發氏より贈られ、筆者がお借りしたものである。本文三七六頁ほどの書物ではあるが、江蘇省の南通や海門の農村で生産された手織綿布が、近代にはいつて長い間、国内の広範な市場で販売されつづけていたことを示す史料である。

本書については、「中国近代経済史研究資料」——一九八四年下半年——に、蘇双南という人が簡単に紹介している。本書の編纂にあたったのは「張謇与南通研究中心籌備組」であるが、蘇双南によるとこれは南通市社聯、江蘇省社会科学学院、南京大学の三者によって創設された研究組織である。またこの組織は、本書につづいて張謇の関係した企業の史料も編纂する計画をもっているようである。ただ本書については奥付のようなものがなく、裏表紙に「張謇与南通研究」叢刊之一であることと、印刷所と実費の価格が表示してあるだけである。この体裁からすると、本書は一般には販売されなかつたようである。

本書の編纂過程と著者の林孝百については、一九八四年一月付の「張謇与南通研究中心籌備組」による「前言」に簡単な説明がある。本書は、林孝百が執筆した「通海閔庄布史料」と「通海京県庄布史料」という二つの文献を、上編「閔庄布」、下編「京県庄布」としてまとめたものである。もとの二つの文献のうち「通海閔庄布史料」については一九六二年に油印本が発刊されたことがあるが、もう一つのは手稿本である。この二つの文献を「近代南通土布史」と

して編纂するにあたって、重複部分や土布史と関連のない部分は削除され、不適切な用語については修正がくわえられている。

上・下編につづいて最後に付録があり、南通、海門で生産された各種手織綿布の規格、販売地、販売量に関する統計と、「関外漫遊記」と題する小文がおさめられている。「関外漫遊記」の著者である林左波は、本書の著者の従弟である。本書の著者の経歴については次に紹介するが、林左波も同じ仕事に従事しており、一九三〇年に関庄布の販売量が減少した東北市場に調査のために訪れたが、「関外漫遊記」はその時の旅行記である。ただし収録されているのは東北市場に関する記述のあるところのみで、南通へ帰る途中の北平や天津に関する部分は省略されている。

著者の林孝百は研究者ではなく、一九一七年以来、上海の陳子記花布号で関庄布と綿花の取引にあたってきた商人である。従ってとくに上編の「関庄布」は、実際に商業活動に従事してきた経験に基づいて叙述されている。下編の「泉京庄布」については、著者は実際の商業活動に基づく知識に乏しかったようで、この種類の綿布の取引にかかわったことのある人からの聞き取りや文献の収集によって、一九六四年に手稿本が完成した。

以上に述べてきたところからわかるように、本書は研究者の農村綿紡織業研究の成果というのではなく、手織綿布の取引に従事してきた人が、自らの経験あるいは他の人の経験の聞き取りに基づいてまとめた史料的性格の強い書物である。「史料紹介」として本書をとりあげたのは、このためである。

なおここに出てくる関庄布、泉庄布、京庄布というのは、いづれも南通や海門の農民が生産する手織綿布である。名称の違いは、販売市場の相違による。関庄布の市場は東北であり、泉庄布は江北お

よび山東省を市場としていた。京庄布は南京付近から安徽省にかけて、販売されていた。南通、海門の農村で生産される手織綿布には、これ以外に杭州を中心に浙江省を主な市場とし、江西、福建両省および安徽省南部にまで販売された杭庄布、それに浙江省や江西省で売られた灰坯布があった。南通や海門の農村で生産される手織綿布は、国内に広範な市場をもっていたのである。

二 関庄布

近代以前から、南通や海門の農村で手織綿布が生産されてきたが、本書によると清初以来その一部は山東商人によって東北市場へ販売されてきた。ただこの稀布は生地があらく、布の長さや幅は不統一であった。

咸豊年間にはいって、南通、海門の手織綿布の主流は稀布から尺套布にかわり、同治年間には稀布の東北市場への販売は跡をたつた。咸豊年間の營口の開港を前提とし、この尺套布以来、南通、海門の手織綿布の東北市場への販売が本格的に始まった。

尺套布が稀布と異なる点は、長さ二丈三尺、幅一尺弱と規格性があつたことである。ただし尺套布の原糸は、稀布と同じくまったく手紡糸であった。

趙崗は、農村織布業において手紡糸にかわって機械糸が採用される理由の一つとして、手紡糸では織布できる布の長さに限界があつたことをあげているが、関庄布の尺套布から大尺布への変化は、機械糸の採用にはたしかにこのような理由が関係していたことを示している。

南通や海門の農村には、一八八〇年代中頃から一〇番手や一二番手のインド機械糸が上海から流入し始めた。最初は手紡糸の小商人

が売り始めたようだが、ついで皮貨店の経営者や錢業者、布業者が紗庄をひらき、インド糸とともに上海の紡績工場の機械糸も売るようになった。この機械糸の流入とともに、関庄布の主流として生産されるようになったのが大尺布である。大尺布は尺套布と異なって縦糸に機械糸を用いていたが、長さ四丈五尺、幅一尺二寸と、布の長さが尺套布の二倍近くにまでのびたところに特徴があった。こうして機械糸を原糸とした使用して関庄布が、南通や海門の農村ではじめて生産されるようになった。さらに南通における大生紗廠の開設によって、機械糸を原糸とした関庄布の生産量が急増し、また横糸にも機械糸を用いるようになった。

関庄布の年間生産量についてみると、満洲事変によって大打撃をうけるまでの期間中の最高水準は六〇〇万匹であった。この生産量の最高水準には一九〇五年にはじめて到達し、一九二一年までの間に何回かこの水準を記録した。生産量だけでなく、原糸が一二番手の機械糸、織機が投梭機という条件の範囲内で質的にも最高の水準の綿布が生産されるようになった。機械糸——とりわけ大生紗廠の綿糸——の採用が、手織綿布の生産量と品質の両面において発展を促すことになったわけである。

関庄布は南通、海門の農村において買い付けられ、上海に集められた後に営口あるいは安東にむけて移出された。それでは、この間の関庄布の取引の構造はどのようになっていたのであろうか。著者の経歴からして、この部分が本書の最も詳しいところである。

南通や海門において関庄布を扱う布庄——関庄には通幫と海門幫とがあり、前者は機械糸を原糸とした綿布を、後者は機械糸を縦糸に手紡糸を横糸に使った綿布を主に取扱っていた。これらの関庄が担う業務は、大きくわけて三つあった。綿布の買付、整理、上海へ

の輸送である。

農民からの綿布の買付は関庄が直接におこなう場合と、小商人を仲介する場合があった。買付値段の決定は、布に使われている原糸代に、原糸代の一定割合を織賃として加算する方法がとられていた。従って、綿糸そのものの価格の変動を考慮しないとすれば、綿布の買付値段は使用している原糸の密度、すなわち綿布の重量によって決定された。関庄は買い付けた綿布を重量を基本条件として等級に整理し、上海へ輸送した。

上海が開港し南通や海門の綿布が上海から東北市場にむけて移出されるようになってから、関庄は臨時に上海に係員を派遣し東北からやってきた商人との取引にあたっていたが、一九世紀末からの関庄布の販売量の増加に対応しきれなくなり、上海に常駐して市況報告や綿布の買付資金の確保、そして取引にあたる出店をおくようになった。出店——庄客には二種類あった。一つは南通や海門の関庄のまったくの支店であり、経済的に独立していない「坐庄」である。もう一つは特定の関庄の出店ではなく、独立して複数の関庄にかわって上海で活動する「帶庄」である。当然、「坐庄」を上海におくことができたのは、資力の豊かな関庄である。

上海において、庄客を通して関庄から綿布を買うのは、次のような商人である。一、号幫。これは船号幫の略称であり、大部分が寧波出身であった。もともとは次の客幫などのために上海から棉花や綿布、営口から豆油や豆餅の輸送にあたっていたが、その後自らが関庄布の売買にのり出すようになった。号幫は関庄に資金の前貸をおこない、関庄布の営口への販売に優勢を占めるようになった。もつとも後に関庄の資力が豊かになり信用が高くなると、庄客を通して上海の錢莊から融資をうけることができるようになり、号幫の前

賃はなくなつた。二、客幫。營口の商人で山東出身者が多く、号幫の帆船を雇つて関庄布を營口に運んだ。関庄布の取引量はこの二種類商人が圧倒的に多かつたが、そのほか安東幫、散幫、青藍幫と称される商人たちがいた。

関庄布は上海から營口と安東にむけて移出されたが、營口に入った関庄布はさらに遼陽、長春、哈爾濱、齊齊哈爾などに販売された。他方、安東に入った関庄布は鴨綠江流域で販売された。一九二〇年代中頃までは營口に入る関庄布の量が圧倒的に多かつたが、一九三〇年頃になって安東向関庄布の移出がかなり増加した。しかしいづれも満洲事変によって大きな打撃をうけ、関庄布の東北市場での販売は困難になつた。

ところで関庄布の原糸を生産していた大生紗廠についても史料の刊行が待たれるが、同廠は民国初年まで一二番手綿糸の生産量が八〇%を占めており、南通、海門農村織布業における機械糸の採用、そして関庄布生産量の増加なしにはその発展はあり得なかつたのである。それだけに東北市場における関庄布販売の困難は、大生紗廠にとつても大きな打撃になつた。一九二〇年代、三〇年代にはいると、大生紗廠はそれまでの関庄布用原糸生産から転換し、二〇番手綿糸の生産を増加させるとともに——一九三二年には八〇%——、上海や重慶に事務所を開設して南通、海門以外にむけても綿糸の販売に努力するようになった。

満洲事変が関庄布の東北市場での販売に最終的な大打撃を与えたとはいへ、関庄布の販売量の減少は突如として生じたわけではない。満洲事変以前に関庄布の販売を困難にする要因が形成されてきた。この要因について本書は、日本の支配下にあつた大連の東北市場における経済的地位の上昇と、營口がもともと内包していた金融、通

貨面の不便さという二点をあげている。

この二点について、本書はさらに立ち入つた言及はしていないが、佐々木正哉、倉橋正直両氏の研究を参考にして少し補つておこう。中国の開港以前、營口はすでに東北随一の海港となつており、營口開港後は東北の海上貿易を独占する状態であつた。營口は遼河の河口に位置し、その水運を利用した東北各地との間の商品流通が展開した。しかし一九〇二年の南滿洲鉄道の開通によって、遼河の水運は影響をうけるようになった。營口の貿易額は一九世紀末から日露戦争頃まではピークで、その後は停滞状態におちいつた。日露戦争以後、營口商人の大連への移動が顕著になるようだが、一九一〇年代には、營口は大連にその経済的地位を奪われてしまつた。

この経済上の地位の逆転は、一面では日本支配下の大連の経済的成長によって生じたものではあるが、他面では營口が本来もつ経済上の弱さによつてもたらされた。營口では現銀の不足を補うために、過炉銀制という通貨制度を採用していた。過炉銀制は營口の経済の繁栄を生みだしたが、この通貨制度は營口商人の個人的信用の上に、十分な準備金のないままに大量に発行されるものであり、一たび取引上に蹉跌が生じると營口経済に大きな影響を及ぼすことになつた。

日本支配下の大連の経済的成長にくわえて、營口経済のもつ不安定性によつて、營口の東北市場における経済的地位は低下した。これが満洲事変前において関庄布の販売量を減少させた要因として、まず考えられることである。それでは南通や海門における関庄布生産それ自体には、何の問題もなかつたのだろうか。このことについては、後に本書から推測し得る点を述べることにする。

三 東京庄布

前にもふれたように、著者の林孝百はこの東京庄布の取引にはかわっておらず、叙述はこの種の綿布の取引にかかわった人々からの聞取りに主に基づいている。また下編のなかの「杭庄布業」や「顔料業」は、それぞれ業界の関係者が執筆しており、「土布公会」と「土布市場」の部分には、関連する新聞記事やそれぞれが発行した文献が収録されている。

手織綿布の販売先による区別はもとはなかったが、咸豊から同治年間に閩庄布、県庄布、京庄布といった区別が生じた。閩庄布と県庄布・京庄布の、南通、海門の手織綿布生産量に占める割合は、次のように推定できるようである。本書によれば、県京庄布は年間生産量の三〇%を占め、閩庄布は最盛期には七〇%を占めた。しかし南通、海門の手織綿布生産量は、最盛期には一〇〇〇万匹にのぼったと、先にふれた蘇双南は述べており、これで本書の示している閩庄布最盛期の生産量六〇〇万匹を除すると、七〇%という概算は少し高すぎるようである。閩庄布の割合が六〇%台、県京庄布が三〇%、そして残りの数%を杭庄布およびその他の綿布が占めていたと推定するのが妥当ではなからうか。

県京庄布や杭庄布はその生産量において閩庄布より少なかっただけでなく、品質の面でも閩庄布に比較して規格性に乏しかった。また県京庄布を扱う商人の活動も、閩庄布を扱う商人ほど活発ではなかった。閩庄布を扱う商人は上海に本店を置いて沙布公所を創設し、その沙布公所が營口に駐在員をおくなどして閩庄布の市場調査や販売促進にあたった。これに比較すると県京庄布を扱う商人の活動は消極的で、客商が南通に綿布の買付にやってくるのを待っている状態であった。

る状態であった。

この東京庄布および杭庄布の生産が、南通、海門の農村織布業において重要な位置を占めるようになるのは、一九二〇年代後半以降、閩庄布の不振が顕著になってからであった。そして綿布の品質上の改良も始まった。従来の雑多で不統一な綿布にかわって、中機布、大機布といった規格性のある綿布が主流になった。中機布（長さ四丈、幅一尺六、七寸）についていうと、二〇番手という閩庄布に比較して細い機械糸を原糸として生産された。大機布の規格は長さ七丈五尺、幅二尺一寸であるが、共通して大尺布と異なっているのは幅が広がっていることである。これには、次にふれるように織機の変化が関係していた。

一九三五年には南通に土布市場が開設されたが、その目的は新しく生産されるようになった綿布の規格を維持することにあった。そのため検査所を設け、農民がもち込む綿布のうち規格にあったもののみを買いいれようとしたのである。この土布市場の発起人には大生紗廠も参加しており、閩庄布が衰退した現在、新しい綿布生産の発展に積極的に介入しようとしたことがわかる。

四 手織綿布生産の変化

本書全体を通してみると、「土布史」とはいっても、手織綿布とわりわけ閩庄布の流通面についての叙述が中心である。それは著者が上海の花布号で閩庄布の取引に従事していたという経歴からして、やむを得ないところであろう。それにしても確実にいえることは、農村織布業は外国綿製品の流入によって簡単には破壊されなかったことであり、綿布の生産量および品質の面で発展した。それではその間に生産形態等どのような変化が生じたのか、下編第七章、八

章を中心に本書の示唆するところを紹介しよう。

手織綿布生産の変化は一九一〇年代にそのきざしが見えたが、本格的には三〇年代にはいつてから始まった。滿洲事変によつて関庄布生産が大打撃をうけた後の手織綿布生産の改良は、日中戦争の開始にいたるまで京庄布や杭庄布を中心に生産量を増加させることに成功したようである。杭庄布の生産量は、日中戦争前の一〇年間に最高水準に達した。また南通、海門の手織綿布の総生産量も、蘇双南によれば一九三六年には滿洲事変前の最高水準に回復した。

一九三〇年代にはいつていくつかの布廠が創設されるとともに、農村織布業の織機や織布技術の改良をおしすすめるための伝習所も開設された。農村織布業における織機の変遷は、投梭機↓拉梭機↓鉄輪機と展開する。より幅の広い綿布をより速く生産できる点で投梭機より優れていた拉梭機は、一九一〇年代後半に南通の一部で使用され始め、その後徐々に普及し三、四台の拉梭機を備える織戸も出現するようになった。織布作業を中断することなく進行できる点で織布機械の基本原理をそなえた鉄輪機の普及はもう少し遅れ、一九三〇年代にはいつてからである。南通でのこうした新しい織機の普及時期は、河北省の綿布生産地域の場合と比較して早いわけではない。関庄布の衰退が顕著になって以後、これらの新しい織機によつて比較的細い機械糸を原糸に、中機布、大機布といったより長く幅の広い綿布が京庄布や杭庄布の主流として生産されるようになった。そして規格の統一をはかるために、織戸に原糸や顔料を与えて綿布を織らせる定機制が採用されるようになり、生産形態の面でも農村織布業に変化が生じた。この定機制は一九一〇年代にすでに綿布業にのり出した網布店が採用していたが、本格的には三〇年代にはいつて展開した。趙崗によれば、前貸問屋制には二つの形態があった。第一は、織戸

は商人から綿布を生産するのに必要なだけの綿糸の前貸をうけ、織賃は現金でうけとる形態である。第二は、織戸は綿布を生産するのに必要以上の綿糸の前貸をうけ、残余の綿糸が織賃にあてられる形態である。趙崗、嚴中平とともに、第二の形態のものは一九三〇年に南通ではじめて採用されたとしているが、本書によると、南通の定機制はこの形態のものだけだったわけではなく、早くから定機制を採用した網布店、それに灰坯幫は第一の形態をとっていたように理解できる。

このように南通でも、商人が原糸や顔料を一定の農民に前貸し、規格化された綿布を生産させるようになった。ただりかえしになるが、ここにみたような織機や生産形態の変化は、関庄布の衰退後に本格的に出現した。関庄布についても大尺布には規格性があつたのであるから、定機制のような生産形態が関庄と農民との間に成立する可能性はあつたであろう。しかし本書のなかには、定機制の展開をうかがわせるような記述はない。実際に織機あるいは原糸、それに生産形態に変化がなかったとすれば、それは前に述べた要因にくわえて、市場の要請の変化に応じ得なかつた関庄布生産それ自体に存在した衰退要因と考えられよう。

一九三〇年に東北市場を調査した林左波は、東北人民の綿布に対する好みが変わつていたことを発見した。関庄布はその等級のつけ方からもわかるように、耐久性をうり物にしていたが、この頃には、耐久性は選択の基準ではなくなり、見た目が美しく価格の安い綿布が好まれるようになっていた。

〔付記〕

なお、南通、海門農村織布業と東北市場の關係については、野沢豊「資本主義の発達と辛亥革命」〔講座中国近現代史〕第三卷所収〕が言及している。

(下関市立大学)